



国際情報

INTERNATIONAL & INFORMATION

新潟国際情報大学広報 第3号

〒950-22 新潟市坂田字カタハタ46番地1 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuis.ac.jp ホームページ http://www.nuis.ac.jp

海外研修のすすめ

国際交流委員会委員長 市岡 政夫



本学では開学二年後の一九九五年度から、学生の海外体験―異文化体験―の機会として、毎年三月に海外研修を実施している。今年度も、アメリカ、ロシア、中国、韓国へと、四コースの海外研修グループを派遣することになった。参加するほとんどの学生にとって初めての外国行きとなるこの事業から、学生たちは、実に多くの豊かな経験を積み、強烈な印象を受けて帰ってくる。このことは、同行してみても強く感じられたし、帰国後これらが編んだ報告書を読んでも伺い知ることができた。言葉に詰まったり、異なった風俗習慣に触れたり、今まで接したことなかった街並みや自然の中に身をおいて、本学の学生が、大袈裟に言えばこの人類社会の中で「自分も『外国人』の一人」なのだと思感する絶好の機会になっている。「国際化」が進めば進むほど、当分の間は、「自分も『外国人』の一人」だと認識することを、否応無く求められる。そのとき、「日本人」という「外国人」である自分と、それぞれの国の「外国人」

との「差異」を感じとってほしい。「差異」とは、言うまでもなく「差別」とは異なるものである。「差別」を意識することは往々にして「蔑視」につながる。一方、「差異」を認めることは、相手を人間として「尊敬」する気持を生む前提になる。

この海外研修事業からは、次のようなことも是非学びとって欲しい。前述のとおり、初めての外国経験から受ける印象は強烈で、鮮明である。いわば第一印象が、その国全てと言いたくなるほどに、固定的に脳裏に焼き付けられてしまいがちである。しかし、一旦焼き付けられた画像は、その後、二度、三度と足を運ぶ毎に、あるいは、その国についての学習が深まる毎に、修正を加えられなければならないことに気付くということである。

二度外国に行けば単行本が書ける。二度目には週刊誌の記事は書ける。三度目には何も書けなくなってしまう。というよく言われる喩えは、表現はさまざまにされるが、一面の真理は突いているようである。しかし、一度目が無ければ何事も始まらないのは間違いない。それも早いうちに超したことはない。

今年度から、本学の海外研修は、各コースとも学年の枠を外しどのコースへも参加することができるようになった。在学中に、より早く、より屢々、外国経験から好ましい刺激を受けられるように、との願いからはかならない。



情報文化学科 講師 高橋 正樹

一九八八年九月一日、私は北塔のかつての小王国の都であったプレー市の僧院で「一時出家」し、こんな朝をひと月続けた。二年半の留学がそろそろ終わりに近づいた頃だった。研究には直接関係ないが、タイ文化を理解したいと思ったので、以前、調査のためにまたま立ち寄った僧院にお願いしたのである。

出家の儀式得度式のためのバリ語の暗記に随分苦しんだが、式は盛大だった。何の義理もない私のために、住職の家族と近所の人たちが出家の準備を全部心配してくれた。近所の人たちは、一日



タイ留中、タイのは私を概して大らかに受け入れてくれた。タイの人の鷹揚さが謎でもあった。一時出家のように、相手の文化に身を投げ出し異文化を理解し尊重しようする姿勢が、逆に文化の違いがあまり重要ではない状態、すなわち何の鎧もつけない裸の人間の関係を創り出したかもしれない。

しかし、もつと大きな理由は、タイ社会それ自身にあるのではない。タイ社会には多様性があり、したがつて異質なものに對して開放的でもある。私を受け入れてくれたタイの人々が、私との間にあまり壁をつくらなかった。一般に、タイ人は所屬する組織や集團からは比較的自由に、思考し行動する傾向があるといわれる。タイでは、個人があまり国家（民族）や企業に吸ひ取られていない。そもそも、かれらはあまりそういった鎖をつけていない。かれらはひとりの人間として、私にもそして他の人にも接しているのだ。

社会が文化の多様性と開放性を認めれば、文化の違いが互いの障害ではなくなり、その先に一個の人間としての共感が生まれるだろう。それが、いまの日本に一番欠けていることかもしれない。

[illegible]

情報文化学科 教授
海野 芳郎

幕末の日本にあつては、幕閣の当路者が、情報（国際法の知識など）に乏しかったがゆえに、相次いで不平等条約を結ぶは

たかは周知のところであろう。その明治は、「外交と統帥」の均衡を得、外国からの情報も得て、日露戦争を頂点とする対外折衝をまずは無難に処理したが、大正期を越えて昭和の激動期に至ると、軍部の台頭による「二重外交」の病理は深刻の度を加え、内外の情報を欠落したまま、太平洋戦争の奈落に転落するの悲劇を経験するに至った。

最近の「戦争外交史料」の公開は、過去日本が辿った「外交軌跡」を実証的に跡づけてくれる貴重なものであるが、時には、不明な箇所を更に徹底的に照射して、当時の外交政策・技術の是非を問わなければならないときもある。たとえば、前回の「第二三回戦後公開史料」で、太平洋戦争末期、アメリカの潜水艦が不法に撃沈した「阿波丸事件」に対する保障交渉が、当時のアメリカからの援助を考慮して見送られていたことには驚かされた。敗戦後半世紀を経た今日、外交はもはや外交当局だけの専管事項ではなく、広く国民を含めた国民外交、全体外交が目ざされている。それだけに幅広い情報の収集と分析がますます重要なものとなってきている。

科学と技術

情報システム学科 教授 大和 淳二

学生の「理科離れ」が指摘されてから久しく、この傾向は今も変わりありません。現在の日本の隆盛は科学・技術の発展に負う所が大きいので、これは重大な問題です。小・中学生で理科に興味を持つ人の割合は70%にも及びませんが、政治の貧困による歪んだ高校以降の教育や社会的風潮が、この貴重な「科学への芽」を枯らしているのが現状です。

本講義の狙いの一つは学生に理科への関心を今一度呼び戻し、有為な才能が埋もれてしまうのを防ぐことです。従ってまず小・中学生の大半が興味を示す課題、即ち宇宙・天文・古生物・学等を講義に取り入れています。更に課題の一部を学生に提案してもらふことにより、学生の一層の科学への関心を促がれています。今後何れ分野に進むにしても科学・技術のセンスは必須ですので、学生の積極的な講義への参加を希望します。

個人のエゴイズムの壁に阻まれてその対応が先送りにされつつある環境破壊の問題を取り上げています。これは利便と快楽を追求する人間の本性に深く関係し、また経済成長にも対立するものですから、その解決は容易ではありません。

本講義はゴミ・大気汚染・オゾンホール・内分泌攪乱物質などを中心に講じますが、それら個々の表面的な現象に目を奪われることなく、その裏側にある人間そのものに思いを馳せ、政治・経済・制度・心理学等を含めた広範な問題としてこれを捉えてもらいたいと思っています。

アメリカ研修に行つて

阿部真由美

三月二八日、私達はアメリカへ飛び発った。いざ足を踏み入れるとあらゆるものの規模の大きさに圧倒された。いかに土地が広大かは道の幅からもうかがえる。そして、映画のような街並にアメリカに居るのだと実感して私の五感はずり回った。

サンフランシスコではいくつかの大学や会社を訪問した。メンローパークでは、実際に地元の学生に混じって授業を受けたが彼等の授業の受け方に感心した。とても熱心だし、よく質問をする。教授と積極的に意見交換が行われていた。日本の学生とは違って、人前で発言することに抵抗がないのだと思う。また、サンマイクروسステム社や、ヒューレットパッカー社では食堂や運動施設も充実していて、中庭などがあり、建物の色もかわいらしく鮮やかで、日本の会社が病院の様に思えてきた。普段では見られない奥の奥までもとても親切に案内してもらい、感激だった。

二日目には初めはびくびくしていた英語にも慣れてきて自分の言葉が相手に伝わり、理解してもらえたことがうれしかった。一日の予定が終わってからの自由時間で買い物をしたり、食事をしたりという機会は自分達を試すチャンスだった。特にサンフランシスコでは夜遅くまで出歩いてアメリカを満喫できた。

私にとって印象的だったのは、国境をこの足で越えたことだ。メキシコに入るとアメリカとは雰囲気ガラリと変わった。建物も原色を使っているものが多かったし、看板も私には昔のもののように見えた。車を見ても、建物を見ても遅れを感じたし、人種、言葉、文化の違いに驚き、アメリカに着いた時より動揺してしまっただけ。もう一つ印象に残ったのは、本場デイズニールランドの訪問であるが、遊びに行った訳ではない。デイズニールランドの各アトラクションがどのように運営され、管理されているかを見学したのだ。華やかなデイズニールランドの裏側はテレビでも見れない貴重な体験だった。

海外研修アメリカ

牛腸 和昭

私が感じた一番のアメリカというよりは、ハリウッドのユニバーサルスタジオである。映画で馴染みのあるジェラシックパークやウォータールード等のアトラクションが特に印象深く、その二つは観客が水をかぶる仕組みになっている。ウォータールードの客席は階段になっていて、前列のシートなんか丁寧に「MENT」書いてあるのに、私たちは知らずに座ってしまい、案の定、先生も含め頭から水をかぶってしまった。このほかにもバックトゥーザフューチャーや「J」のアトラクション、そしてスタジオ内を周遊してくれるトリリバスもあった。自分が今まで見てきた映画をこのようなかたちで見るといやが上にもハリウッド映画を身近に感じずにはいられず、なおかつアメリカ(人)のスケールのかさを改めて実感させられた。

旅行中楽しい事ばかりではなく、今回(この先も)そのなのだろうがネックとなったのが言葉の問題だった。研修旅行に行く前は自分の中で簡単な日常会話なら頭に入っていると思っていたのだが、実際はどういう訳か言葉が出てこない。順番に並べると、一番多く使った英語は「Excuse me!」「I am sorry!」。情けない話だが中学生レベルの単語すらまともに出てこないのが現状だ。たまに短文をしゃべったかと思えば、「トイレはどこですか?」「これが買いたい」等の質問や要求ばかりだった。悔しかった。私はこれからも、もっといろいろな国を見たい。だからこの屈辱感を忘れずにこれから先、どれだけでもわからないが不自由なく英語を話せるようにがんばりたいと思う。

ロシア研修旅行に参加して

上林 真子

私は当初ロシア研修に参加することを決まっていた。その理由には、水が悪い、治安が悪い、厳寒、チェノブイリ原発事故の後遺症で農作物は今も放射能に汚染されているなどの報道されているロシア事情がそうさせたのであろう。だが、実際にロシアという国土に一步踏み入れてみると、そのような先入観は知らぬ間に消えていた。

ハバロフスクで印象に残っているのは、凍結したアムール川の上を歩いたことである。そこでは多くのロシア人が釣をして楽しんでいた。また、私たちが歩いている川の対岸は中国であるという説明には何とも言えない感動を覚えたものだ。

ウラジオストクではアムール湾クルーズが印象深い。船酔いを心配していたが、空気の良さと楽しさが重なり、とても良い時間を過ごした。船上ではワインを廻し飲みしたり、写真を撮り撮ったりした。

両都市で大学訪問が行われた。ハバロフスク教育大学と極東大学である。こちらの学生も、高度の日本語を操る技術を得ていた。この大学訪問により、私の語学力、勉強不足を痛感させられた。

両都市を比較すると、街並みや建造物はウラジオストクの方が近代的であったように感じた。交通事情はどちらも同じようなものであった。道路はガタガタで、自動車の排気ガスは黒く、環境への配慮が足りないように感じた。

この研修を通して、かけがえのないものを得ることができた。それは、参加した学生間に一種の友情のようなものが生まれたことである。その例として、ある学生の誕生日会をその日の前夜と当日に開いたことが挙げられる。誕生日会の主役でない私も、研修に参加して良かった、みんなが一つになった、と実感したひとときであった。

ロシア研修参加後は、日本で報道されるロシアのニュースなどに、今まで以上に注目するようになった。実際に自分の目で見たことにより、ロシアに対する親近感が生じたのだ。この研修により私は世界を客観的に見る事ができるようになったのだと思う。

ハバロフスクとウラジオストク

村川 藍子

ハバロフスク市は新潟空港から直行便で約二時間、日本との時差も一時間しかありません。ロシアはこんなに近かった。しかし、モスクワからハバロフスクまでは空路で十五時間ばかり、時差はなんと七時間。その大きさに驚かされます。

現地ガイドのセルゲイさんによれば、ハバロフスクの冬は「長く寒い」。十一月から四月が冬で、通常平均気温はマイナス二十五度ほどだということでした。しかし、近年はロシアも暖冬で、平均気温もマイナス十五度ほどだということでした(マイナス十五度は暖冬)。これだけ寒ければ、対岸が見えないほど大きいアムール川の水面が完全に凍ってしまふのも納得です。私たちはアムール川の上を歩き、走り、跳んだり跳ねたりすることもできました。

次に訪れた極東最大の都市ウラジオストクは、ハバロフスクより暖かく過ごしやすいのですが、港灣都市だけに風が強いのは閉口しました。大変興味深かったのは、市内を走っている車の八パーセントが、なんと日本製であるという点です。異国情緒の色濃い西洋的な建物の並ぶ街中を、日頃見慣れた車が走る光景それはとても奇妙な感じでした。このようなことになった理由としては、ロシアの国産車工場が西側にあり、輸送コストがかかること、さらに日本の中古車の方が性能面でも環境汚染の面でもロシアの新車より優れていることなどがあげられます。

とにかく、今回ロシアでいろいろの物を見て、触れて、体験して吸収しました。百聞は一見にしかずを実感できて満足です。

中国を見て、聞いて、味わって…

桜井万致子

今年の三月一四日から二八日の二週間、研修旅行で北京・上海に行ってきた。この二週間は私にとって新鮮な日々でした。なぜなら、私が自分の目で見て、音を聞き、雰囲気を感じたりしていたから。

私は普段の生活の中で、テレビや新聞や写真などを通じて自分なりに中国の「大きさ」を想像していました。ところが実際に中国へ行ってみると、見事にそのイメージは壊れました。もちろん中国が大きな国で、広い土地だということとは知っていました。しかし、故宮や万里の長城、視界に入りきらずに広がる景色はそういう「大きさ」からは想像できないものだったのです。それは実際に自分の目で見て、初めて感じた「大きさ」でした。

それだけに限らず、五感全部を使って「見た」ものは私にとって新鮮なものでした。例えば、溢れかえるほどの車や自転車の数の多さに恐怖を感じ、見たこともないほどの人の多さに圧倒されてみたり。宋慶齡の故居で年月を感じてみたり。シシカバブをほおぼって、ついでにその場の雰囲気を感じてみたり。他の誰でもない私自身が見たり感じたりしたからこそ、新鮮に思ったのだろうし、楽しかったのです。今、これらのことを皆さんに伝えようとしても、うまく伝えられません。でも、皆さんが実際に行けばその新鮮さはすぐに分かります。

私も外国人

黒崎資多右

中国研修旅行では様々な出来事がありました。たとえば、蛇を食べること。道端で男の人が2人がかりで蛇の皮を剥がしているのを目のあたりにしたときには「蛇って、食べ物だったんだな…」と、妙に感動してしまいました。そもそも、いつから私は蛇は食べ物ではないと考えていたのでしょうか。

夜中に公衆便所が暗いこと。全部のトイレが暗い訳ではありませんが、夜中に公衆便所に行くこととしたときに、あまりの暗さに入るのを諦めました。

日本では当り前のこととして、気にも止めないようなことが当り前ではない。このことが、私を驚かせたのです。

ただの旅行会社の観光旅行ではこれほど強く、この当り前と当り前ではないことを感じはしなかったでしょう。以前、高校生のときにヨーロッパへ旅行しましたが、それは日本人だけで構成した団体の観光地めぐりでした。その中で、私は常に日本人と行動し、見るもの全てを外国人のものとして、日本を基準に見ていました。しかし、今回の海外研修では、蔡先生のおかげもあって、常に中国の学生と共に行動し、語り合うことができたのです。その中では、私たちは、外国人であることを嫌でも意識させられます。

物事を、日本を基準に見るのではなく、自分が特異な存在かもしれないと考え直すきっかけを与えてくれることに、この研修旅行の意味があるのではないのでしょうか。

ここは本当に韓国!?

野崎 愛

ここは韓国!?! 日本ではないかと首を傾げてしまいそうなソウル。看板の文字や行き通う人々の会話は異国そのもの。でも、どこことなく親近感が漂う。異国にありながら自国にいるような不思議な感覚と共に、私の心は韓国の空気に同化していった。韓国は、授業や写真でしか知らず未知の塊だった。

研修旅行では、実際にその国の料理・建物・人々という身近なことを体験した。パズルのピースのように、自分の中で一つずつそれらを並べ組み合わせていった。が明白で識別しやすいピース。複雑でどこにあてはまるか見当もつかないピース。まだ、作品は空白だらけ。完成には程遠い。けれど、研修旅行で、韓国の本質に一歩足を踏み入れることができたような気がする。また、空白の部分を埋めたい、もっとピースを増やしたいという気にもなった。

事実、私は多くのピースを求めて、研修旅行の5ヵ月後に再び飛行機に乗って隣の国の地を踏んだ。そして、新しいピースに出会った。まだまだピースは隠れているはず。今後どれだけ空白が埋められるか挑戦である。

私にとって研修旅行は、海外に目を向けるという積極的思考を定着させてくれた。韓国学生と接して、自分の勉強不足に苛立ちを覚え、今の状況に甘えていいのかという気にもなった。殻を破って海を越えたことで、私は自分を見つめ直すことができた。

日本名との出会い

若杉 裕司

研修旅行中に、何度か韓国の学生と交流した。その中に、日本名「陽子」と名のる学生がいた。幼い頃から高校まで日本に住み、日本語が大変上手な明るい人であった。

日本では一般的な名前で見えやすいことから、私は彼女を陽子と呼んだ。本名は覚えていない。私は少し無神経であった。彼女が日本名に対し、どのような感情を持っているのか聞きもせず、陽子と呼んでいたからだ。韓国人とは慎重に接していたはずなのに、彼女が日本人と変わらぬ話し方だったので、陽子と呼ぶのが自然であった。

彼女は私のことを覚えていないだろう。彼女にとって、私はただの日本の学生であった。彼女に与えたインパクトとえば、私の胸に着いていたサイババのバッチぐらいいなものだ。今、私と彼女の距離は遠く離れた赤の他人だ。では、どうしていれば、彼女に私を覚えてもらうことができただろう。彼女だけでなく、私が韓国の学生とした話とえば、韓国と日本の若者文化についてがほとんどであった。

そこで、私が彼女に日本名について聞いていたら、私も彼女の記憶の片隅に置いてもらえたかもしれない。赤の他人から日韓関係に興味のある男になっていたかもしれない。今後、日本名を持つ韓国人と出会った時は、その出会いの時間を密度の濃い出会いと対話にしようと思う。日本名「陽子」との出会い、私にとって貴重な体験であった。

就職指導委員会

来年三月に初めて卒業生を出すことになるが、本学の就職採用内定状況は、今のところ予期以上のかんりの好成果をあげている。これは、ひとえに県内外の企業の採用担当者が、本学を高く評価して下さったことと、本学へ寄せられたご好意の賜と深く感謝している。本学では、就職指導委員会ばかりでなく、全教職員が実に一体となり一丸となつての就職指導態勢をつくっていることや、四年次学生が私たちの就職指導に実に素直に従つて一生懸命に頑張ってくれたことにより、このように高い採用内定率をあげることができたのだと確信している。

就職指導委員会は、あくまでも採用内定率百パーセントを目指して、今後もおなご一層の努力を続けていく所存である。

就職指導スケジュール

- 就職ガイダンス(三年次生)……年間
- 三年次生父母対象説明会……八月
- 進路登録カード提出……九月末
- 企業対象就職懇談会……十一月
- 企業説明会(学内開催)……随時

各種受験講座開設

- 公務員受験講座
- 情報処理技術者受験講座
- 語学検定(TOEIC・中国語・ハングル能力)

十二月～四月までの行事予定

十二月二十一日(日)～一月七日(水)
冬期休業

一月十七日(土)
後期授業終了

十九日(月)～三十一日(土)
後期定期試験

三月十五日(日)～四月五日(日)
春期休業

二十日(金)
第一回卒業式

三十一日(火)
学年終了

四月六日(月)
第五回入学式

マスコミ 記事から

東日本大学軟式 野球選手権出場

十月二十三日の新潟日報スポーツ紙は、新潟国際情報大学軟式野球部が県秋季大会で優勝し、栃木県で開催される東日本軟式野球大会に出場することが決定したことを写真入で大きく報道した。この記事では、同部の略歴や生き生きとした日頃の練習の様子なども詳しく紹介されている。



交通事故防止について

最近本学学生による交通事故が発生しており、誠に遺憾なことであります。かかる事態が生じないよう各人が次の点に十分注意して運転し不幸な事態がおこらないよう事故防止につとめて下さい。

- 1 交通ルールを遵守し、運転すること
- 2 右・左折を行う際、前後左右の状況を十分安全確認し進行すること
- 3 冬期は日没が早いのでライトは早めに点燈して運転すること
- 4 路面凍結の道路ではスリップしやすいので、車間距離を十分とり運転すること



海外研修



湧 YUUGEN 源

編集後記に代えて

広報委員長 會田 彰

わが国の宇宙ロケットH2の産みの親ともいえる糸川英夫博士に『人類生存の大法則』という本がある。何しろ当年八五才という老大家が『人類は二一世紀に滅亡する?!』という疑問符・感嘆符づきの前著の解答編を用意しようとして書いたものだから、大変な予言の書である。これは著者オリジナルの仮説、『ベドウィンの法則』という視点から書かれている。ベドウィンは砂漠の遊牧民として有名であるが、現在、イスラエル政府が彼らに対して定住化政策を進めている。ビルを建て、そこに定住させようとしたのだが、彼らは立派なビルの中には日常使わない荷物を収納し、ビルの前にテンとを張って生活を続けたという。そこには理由があった。

四方が開かれていたテントに住んでいると、遠くから来る旅人をすぐにみつかることができ、四方のどこからでも招き入れることができる。しかしビルの中では窓からしか客を発見できない。まして、砂漠で疲労困憊した客をビルの中を引き回して入り口に導くことは失礼で、自分たちの伝統的な文化に反することだというわけである。見ず知らずの他人をたいへん丁寧にもてなすベドウィンの人達の習慣は、こうして『砂漠の中では、皆、助けあわなければ死んでしまうんだ』という二千年の体験学習の累積が身体に刷り込まれた文化的遺伝子になっていることが分かる。

もちろん、イスラエル政府のこの試みには、定住生活への切り替えて、ベドウィン社会がより豊かな物質生活を得られるはずだという期待があった。しかし、半遊牧、半定住という奇妙なライフスタイルのセツツルメントには、次第に大きな変化が生じて来たという。犯罪の多発に始まり、盗み、売春、麻薬の常習、アルコール中毒者の急増という経過をたどり、物質的に豊かな生活ということの前に文化的な崩壊ということの方が進行し、種族全体が絶滅の危機に瀕する事態になっているという。糸川博士はこの原因はざっくり、「リーダーシップ不在にある。」と見る。遊牧民族は砂漠の特性を知り尽くし、人々をリードする資質を完備した人を必ずリーダーとして選んで砂漠を安全に移動していた。遊牧から定住へというライフスタイルの変化は、これまでのライフスタイルの中で発揮してきたリーダーシップを失ってしまふ。種族はリーダーシップ不在の悲劇に直面して滅亡の道を歩むことになる。

この現象は、異文化理解の困難とその場合の悲劇を物語っている。潤潤な森の文化の民であり、成熟した超近代の都市環境を自明なものともみなしている点でも現代の日本人は砂漠のベドウィンとは対極であろう。つまり、「絶対他者」であるわけで、「私は絶対の他なる汝を媒介にして私自身を知り、汝は絶対の他なる私を媒介にして私自身を知る」に至る。それが異文化理解の極意であろう。正樹坊主こと高橋先生は「一時出家」の体験でそれを語ってくれた。本学の海外研修プロジェクトの大黒柱である市岡先生のお言葉も、体験した学生諸君の感想も、それぞれの表現でこの原体験の貴重なることを語っている。